

丹羽文雄「厭がらせの年齢」における「非情」

倉持 リツコ

はじめに

青春、愛情、離別などのテーマが、文学世界の主役として君臨してきたのに比べて、これまで〈老い〉は忌避されがちな主題であった。しかし、日本が超高齢化社会に突入したことを背景に、近年、高齢者問題が盛んに議論されている。文学作品を含め、それを主題にした書物等を目に触れない日はないほどさまざまな視点からとりあげられている。とりわけ、高齢者の介護が大きな問題となっている。その中でも認知症を患う高齢者の介護をめぐるトラブルが多く、世人を驚かせる悲惨な犯罪事件までが発生している。^①

ところで、今から七十年あまり前から、到来する高齢化社会を見据えて、これらの問題に着目した先駆的な作品がある。それは丹羽文雄の短編小説「厭がらせの年齢」である。この作品が発表されたのは昭和二十二年二月の「改造」であるが、

同年五月単行本の『理想の良人』に初刊された。その後、新潮文庫をはじめとする文庫本や、各種文学全集の丹羽文雄の巻に収録されている。昭和四十四年二月、ラジオドラマに放送され、「厭がらせの年齢」が社会的に流行語となるほど大きな反響を巻き起こした。

作品は、八十六歳の「うめ女」という、理性的な判断力を喪失した老女を中心に、その扶養と介護を押し付け合う三人の孫娘たちやその家族を描いている。作品の成立について、作者が疎開先から尾崎一雄に宛てた書簡から検証できるように、この作品は、作者の体験に基づいて創作したものであり、「うめ女」は丹羽夫人の祖母をモデルにしている。また、二番目の孫・幸子の夫である美濃部のモデルは作者自身であると考えられる。「私はある中の老女を社会問題にまで取り上げてもらうつもりであった。老境ということはたれにも一度は訪れる重大な問題であるからだ」と、作者自身がこの作品

の創作動機を語っている。「厭がらせの年齢」は、敗戦直後の貧窮な時代に生きる人々の日常生活や当時の日本の世相を反映しながら、先見的な目で高齢者問題を捉えた社会性の高い作品である。それはこの作品が単行本や各種全集に度重ねて収録され、数カ国の外国語にも翻訳され、高く評価される理由の一つであろう。本稿では、老人嫌悪をむき出しに描いたこの作品に示された「非情」に注目して、現代社会の高齢者問題を念頭に置きながら、丹羽の老人文学の特質を探究してみたい。

I 〈老人〉を「悪者」、厄介者とした「厭がらせの年齢」の「非情」

1、〈悪意〉を〈老い〉と結びつけたタイトル

まず、「厭がらせの年齢」というタイトルに含まれる意味を考えてみる。作品の内容は、「うめ」という名の老女のことを中心に書いている。ならば、そのタイトルは「老女」あるいは「老婆」でも差し支えなさそうである。しかし、タイトルに「厭がらせ」というマイナスの感情を引き起こす言葉を冠している。辞書で確認すると、「厭がらせ」とは、「相手がいやがるようなことを、わざわざ言ったりししたりすること」(『広辞苑』岩波書店一九五五年)と説明されている。冷たさとトゲを感じさせるこの言葉は、嫌悪と拒絶にいろいろられた人間関係を惹起する、ある種の陰険さを感じさせる。しかも、

「厭がらせ」の後に「年齢」という言葉が続いている。「厭がらせ」をする原因を「年齢」に帰しているかのごとくである。作品を読み進むにつれて、「厭がらせ」は、「うめ女」の「意地悪さ」のなせるわざだという印象を受ける。今日目から見れば、それは高齢者特有の病状(睡眠障害、認知症など)として見ることができるが、それに関する認識と知識が希薄だったためであろうか、まわりの人々は、「万事」が「うめ女」の「厭がらせ」だと決め付けて彼女の排除に躍起になる。要するに、このタイトルは「厭がらせ」に主体性をもたせた。本来、全く関係のない「厭がらせ」と「年齢」という二つの言葉を密着させ、〈悪意〉を〈老い〉と結びつけ、恰も老人となれば、必然的に「厭がらせ」を好むという印象を与えている。

2、敗戦直後の時代に生きる高齢者の厳しい現実

果たして八十六歳の「うめ女」は周囲の人々に対して、どのような「厭がらせ」をしたのであろうか。作品は、暗闇の静けさを破る「うめ女」の声から描き出している。孫娘の仙子の家に厄介になっている「うめ女」は、夜中に人の気配を感じると、誰構わず「どなたですか」と聞いてしまうのだが、「声をかけたくせに、自分の口がそう動いた」という認識がない。それを家の誰もが迷惑がる。とくに一家の主である伊丹が「うめ女」を「まるで盗人だ。気味の悪い」、「年寄りな

ら年寄りらしく」振る舞ってくれと容赦なく呵責する。それに対して、「うめ女」は「闇の六畳の床で」、「背を丸めて、石のように動か」ずに耐えるしかなかった。このように、作品の冒頭部分からすでに、伊丹と「うめ女」との両者間における強弱の歴然とした懸隔が示されている。

「うめ女」は、三十二歳の時、連れ合いと死別して以来、五十四年間の未亡人の生活を送ってきた。五十二歳の時、不幸にもひとり娘をも失った。作品に触れてはいないが、「うめ女」の孫にあたる仙子、幸子、瑠璃子と啓吉という四人の子供を、「うめ女」が親代わりとなつて育てあげたと推測できる。両親を早くなくした孫たちの養育と世話に明け暮れた日々を送り、懸命に生き抜いてきたはずである。「うめ女」が八十六歳になった現在では、仙子と幸子はそれぞれ立派な家庭を持っている。瑠璃子も二十歳となり、啓吉の年齢は定かではないが、軍人であったことから、いずれも成人年齢に達している。子のいない「うめ女」が老後の扶養と世話を自分が育てた孫たちに期待するのも無理からぬことである。しかし、期待に反して、「うめ女」は親戚の間をたらいまわしにされ、除け者とされる、という現実には直面させられた。

仙子の夫である伊丹は、「不愉快な奴は誰かれの容赦なくほうり出して、自分の思つたとおりをすばとやつてのける奴」である。その〈働き〉によって、伊丹家は「闇肥り」^{（一）} していて、「戦争で損するものは何もなかった」。幸子の場合

は、フランス帰りの画家である夫・美濃部と、三人の子供とともに山村で疎開生活をしてきた。「美濃部が疎開にかこつけて婆をこちらに押しつけてよこした」「婆が来てから、三か月間、わしはしょつ中苛々してるんだ」という伊丹の不満の言葉から、美濃部家にいた「うめ女」が三ヶ月前に、伊丹家にたらい回しにされてきたことが分かる。今度、伊丹は妻を唆して、なんとか「うめ女」を追い出そうと画作するのである。果たして、仙子は、夫の意思に従って、「喧嘩のつもりで、（お婆さんを幸子のところに）押しつけて来るんだよ」と妹の瑠璃子に厳命し、片道の切符だけを握らせ、「うめ女」を厄介払いした。

瑠璃子の「背中に結びつけ」られて、四時間も汽車に揺られる道中は「うめ女」にとつて、悲惨なものであった。瑠璃子に乱暴に地面に放り出された「うめ女」は、腰に打撲を受け、「溝にうつ伏せて倒れた」。やっとの思いで美濃部家に辿りついたが、自分を連れてきた瑠璃子が幸子に罵倒されるし、美濃部にも「また来たのかね」と、「苦い顔」を見せつけられた。そのあげく、「火鉢やら、食卓やら茶単筒やら、子供の本棚やらで、ろくろく座る所もない」荷物部屋の一隅に押し込まれたのである。

疎開から東京に戻ってから状況はさらに悪化した。記憶が混乱した「うめ女」は、時間構わずに空腹を訴えたり、着物などを裂いたりするようになった。医学的な知識の普及した

現在の人から見れば、それらが認知症の症状だと判断できるのだが、美濃部家の人々の目には「お婆さんは自分たちに腹癒せをしている」としか映らなかつた。幸子に叱られ続け、ひ孫にまで嘲笑されるのが「うめ女」の日常となっていた。また、敗戦直後の食料難や住宅難という事情もあって、晩年を迎えた「うめ女」を「人一倍食欲だけはある」「化物」と憎まれ、「お荷物」及び「邪魔者」と厄介者扱いされ、「一日、生きておれば、一日だけ子供や孫に迷惑をかける存在」だと嫌われていた。

しかし、このような悲惨な晩年を送っているのは決して「うめ女」ひとりだけではなかつた。汽車に乗り合わせた、瑠璃子と同じ境遇を嘆く女の話や、疎開先の隣村の状況を見た幸子の、「S村もとんだ姥捨山になつた」という嘆きなどからも分かるように、「どここの家庭だつて、いやいやながら老人を扶養して」いた。「誰からも興味をもたれず、認められず、大切にされなくなつたといつたところで、冬の蠅を何の感動もなくびしゃりと叩いてしまう風に、老人を殺してしま」いたい、とまで記されている。これがあの時代の高齢者の現実だったと言える。そこから戦後直後の日本の高齢者の実態を垣間見ることができる。

3、老いた「うめ女」を見る他者の目と老人嫌悪の根拠
作品には「うめ女」の来歴、境涯についての記述は多くな

い。越後の本家は「由緒ぶかい家柄」だったらしいが、二十歳で結婚した「うめ女」は、夫と一緒に東京に出てから、故郷の越後には今日まで六十年間一度も帰らなかつた。これが「うめ女」の経歴を示した数少ない記述である。そのほかは殆ど他者からの観察に基づいた印象的なものであり、「うめ女」本人の述懐や内面心理に切り込んだ描写は見当たらない。全編を通して、「宗教心」も「知性」もなく、食い意地の汚さと「意地悪さ」に焦点を当て、「うめ女」の「老い」の「醜態」だけを「非情」なほど抉りだして辛辣に批判している。あたかも老いていくにつれて、彼女の経歴（例えば、若いときの暮らしぶりや四人の孫を育てた苦労など）も人格も抹消されたかのように、まわりの人々は老いた彼女をモノであるかのように扱っている。

例えば、片道の汽車の切符だけを手配して「うめ女」を追い出す伊丹、「荷物」のように「うめ女」を瑠璃子に運ばせる仙子、「不格好な人形」のように「うめ女」を背中に括り付けて連れ出す瑠璃子、縁側から落ちた「うめ女」を「柵の達磨」と見る幸子、「ごはんを食べる化物」と瑠璃子と一緒に老人の悪口を叩く、汽車に乗り合わせた三十女、「うめ女」を目にして、「気の毒そうに生きている荷物」を眺めてやつた「巡査」、「溝にうつ伏せて倒れた」「うめ女」を「同情心を起こすよりも、どうやら好奇心を動かし」た「四十がらみの農夫」等々。

見てきたように、登場人物のなかに「うめ女」に対して、温情や同情を示す人はひとりもない。「永生きするから、いろんな罰が当たるのよ」とか、「今の婆さんが、一番立派なことの出来るのは、早く死ぬということ以外何もないのよ」と、その存在を呪うのであった。とくに、「うめ女」と血縁を持たない伊丹と美濃部の態度は無情で、冷酷である。

伊丹は、「うめ女」を「八十六年間の悪業の澱がたまつている」「狸婆め」だ、「痘だよ」と悪態をつく。「うめ女」の行動を「万事がいやがらせとしか思えないのだ」と言い、「うめ女」に対して激しい嫌悪を抱いている。その理由を考えてみれば、「うめ女」は彼にとって、全くの「赤の他人」だという理由もあるが、誰よりもエゴイスト（利己主義者）である伊丹の性質によるものであろう。敗戦直後、物資が困窮していた時代では、配給制度に基づいて、食料や衣料品などの日常物資が制限されていた。当時は法律も秩序もまだ整っておらず、混乱していた時代でもあった。そのような時代こそ、伊丹のような「倫理」も「犠牲心」ももたない者が幅を利かせて、富を得る機会に恵まれたのである。彼にとって、年の老いた「うめ女」は生産性のない「邪魔者」であるだけではなく、「食気だけは一人前」の「うめ女」のもたらす不利益が我慢できなかったのであろう。

しかし、伊丹に見られるエゴイズムは彼ひとりの特性だと言いつつ切れない。この作品のすべての登場人物が一樣に「うめ

女」を嫌悪する態度のなかに、多少とも伊丹と共通するものが見られる。伊丹のような都市部に住む一部の人々が「闇肥り」をしてのし上がる一方、生産性がないと看做される高齢者は、さっさと農村へ追いやられたのである。

このような伊丹と比べて美濃部は、「うめ女」に対して幾分寛容であるかのように見えるが、「へおい」に対する考え方は、彼も本質的に伊丹と変わらない。「うめ女」のことを、「八十六にもなると、肉体だけが何よりも頑強で、魂も、精神も、良心も、一切のものを挫いてしまふのだつた」と、蔑む眼差しを「うめ女」に向けている。

幸子は疎閑生活の不便を理由に「うめ女」を仙子のところ押し付けたが、「本人達にとっては切羽つまつた理由を見つけたにしても、内容は厄払いして、家族の「団欒を回復することが急務であつた」と、語り手はその真実を明かしているように、これは美濃部家に限ったことではあるまい。むしろ、家族制度の変革によって、大家族から核家族へ変容していった時代で、高齢者となった尊属の介護よりも、核家族の利益を優先する風潮が強かった当時の現実を物語っている。「老人ホーム」といふ理想的な社会施設が実現されない以上、日本の家族制度は十年一日の如く（中略）凡俗なくらしをつづけていく」と美濃部が嘆いていた。作品では美濃部の職業が画家と設定されているが、その人物像に作者の姿が投影されていると考えられる。個人主義や核家族を謳歌する風潮が

強くなつていくにもかかわらず、高齢者を介護するための社会的な体制はまだ整っておらず、高齢者の介護が切実な問題となつてきた、という作者の強い懸念が綴られている。理想と現実とのギャップを浮き彫りにし、高齢者がそのギャップの皺寄せを受けていた実態を明らかにしたこの作品は、家族が介護から解放されることが戦後の個人主義的な生活設計の前提になる、という考え方を示している。そして、高齢者の介護の担い手としての老人ホームへの期待や家族制度の改革に関する作者の主張が作品に盛り込まれている。「うめ女」の健全な生活を期待できる場所としてではなく、美濃部夫婦にとって都合のよい「姥捨て山」として期待していた側面もあるが、高齢者の介護を家族だけに委ねる、という従来の介護の仕方の限界を見据えて、高齢者問題の解決の新たな方向性を示めしたといえる。

話は「うめ女」に戻るが、これまで見てきたように、「うめ女」の行動は、周囲の人々に対する「厭がらせ」ではなく、その多くは認知症の症状の現れだといえる。むしろ、「うめ女」のほうが「厭がらせ」の被害者である。「うめ女」のおかれていた状況をリアルに描き出したこの作品は、敗戦直後の物資困窮という厳しい環境と重なって、伝統的なイデオロギーが変化する時代に生きていた高齢者の悲しい現実を浮き彫りにした。現実社会にしばしば見られるように、弱者を鬱憤の捌け口にして、己の精神衛生（メンタルヘルス）を保つ

うとする心理的な陰湿さもあるが、経済性や効率性を重視する近代社会では、生産性の低い者、とくに高齢者を「厄介者」と見做しがちである。「老醜嫌悪」^{ジエコントオピヤ}の思想を強めたその風潮が今の時代でもなお残っていると云わざるを得ない。「うめ女」の境遇に、介護施設で起きる老人虐待事件や高齢者の孤独死など、今日の高齢者の状況を重ねて見るができる。

II 丹羽の老人文学の「非情」とその変化

前述したように、この作品には「うめ女」に同情を示す人物を登場させていない。「厭がらせの年齢」に見られるこの「非情」は、「うめ女」の排除に留まらず、他者から「うめ女」に向けられてしかるべき同情の芽までが作品から削ぎ落とされている。例えば、伊丹家に居候していた瑠璃子の人物造形を見ればそれが確認できる。本来なら、「うめ女」と同じく弱い立場にいる彼女は、「うめ女」に密かにでも同情を示してもいいはずである。結婚もできず、自活もできない彼女の立場の弱さからであろうが、「実行力の伴わない意見は感傷にすぎず、不満は胸の底に畳んでおく」と言わせ、醒めた目で現実を傍観する人物として造形されている。瑠璃子は祖母に対する姉達のやり方に彼女なりの反感をもっているものの、保身のために、「うめ女」に同情するどころか、その排除に加担してしまふのである。このように、同情を示す可能性をもつ唯一の人物の発言権が奪われ、「うめ女」に心を通わせ

る通路が完全に閉ざされる、高齢者を孤立させる作品の構図ができあがっている。

また、この作品は、「地の文の語りと登場人物のジェロントフォビアのことばが、癒着したまま〈老人嫌悪〉をむき出しにし、老人を迷惑をかける存在として躊躇なく排除しようとしている」と、佐々木亜紀子が指摘するように、老人の醜悪さに対する無遠慮な描写が作品の特徴ともいえる。確かに、それについて、この作品が発表された当初から賛否両論があった。例えば、正宗白鳥は、「あれはみんな本当だ、自分が老境に達しているせいとかよく判る」と肯定している一方、作品の描写の残酷さを問題視する意見も多かった。中野好夫は、『群像』の合評で作品の描写にある「底意地の悪い冷酷さ」を批判していた。これに対して、丹羽は『群像』合評の翌月の文藝時評で、「非情ということ」と題して、「私は先頃老女を描いた。意地悪く、辛辣に描いたと評された。ことさらに意地に絡んで抉り出したわけではなかった。己の信奉する非情の精神に忠実にならうとしたまでである。(中略)辛辣とはまるで違ふ精神だ。私はそれに客観性の意味を通してゐる」と反論している。(傍点は引用者によるものである)

丹羽の老人文学の「客観性」について言えば、それを肯定的に評価する論者は少なくない。作者自身もその作品を「客観的に描出」し、つき離して表現することに徹していると自負している。しかし、作者の他の作品はともかく、少なくとも

もこの「厭がらせの年齢」からは冷たくつき離していると感じられても、「客観的に描出」しているとは思えない。ときには、語り手の声が老婆に嫌悪を抱く美濃部のと癒着し、美濃部の主観が色濃く反映しているとさえ感じられる。語り手として「うめ女」に投げる視線は冷酷で、客観的なものとは言い切れない。感傷に溺れていない代わりに、高齢者である「うめ女」に対して憎悪という主観的な感情を剥き出ししていることは明らかである。もちろん、「非情」自体を否定しているのではない。醜い現実をたじろぐことなく凝視し、抉り出し、客観的に表現することは非常に重要なことである。しかし、「厭がらせの年齢」は「非情」に徹していない。描写対象に対する嫌悪を剥き出しにしており、そういう意味で客観に徹しきれず、かえって主観的な叙述態度に陥っている、という点が問題である。

さて、丹羽の言う「己の信奉する非情の精神」とは何か、前掲の文藝時評にそれを解く手掛かりを得ることができると思う。その中で、丹羽が真杉静枝の短編小説「出発のあと」に欠けるのは「非情の精神」だと指摘したうえで、「立派な小説になるためには、モデルの家族を敵にまわすだけの気概が必要である」と説いている。「非情の精神」について、具体的な定義はしていないが、「何が非情の精神かといえば、それは作家が制作に当る場合人生を批判する態度にかかると」とし、「この非情は漱石のいう非人情とも違う。むしろ

残酷な要素すら含むものである」と解釈している。前にも触れているが、「老境ということとはたれにも一度は訪れる重大問題」だと認識し、「私はあの中の老女を社会問題にまで取り上げてもらうつもりであった」と、創作動機を語る作者の言葉に「非情」の必要性を訴えていると理解できる。

つまり、丹羽にとって、高齢者問題を社会的な問題として、人々の注意を喚起するには、「厭がらせの年齢」に見せた〈非情〉はなくてはならない表現方法だったのである。それが作者のいわゆる「己の信奉する非情の精神」であると理解できるように、中島国彦がその「丹羽文雄の出発」の中で指摘されたように、「丹羽は〈非情〉の語にこだわっているが、それは人間的な温かい心が無いということではない。〈非情〉の一語に込められたのは、丹羽文雄の作家としての現実を見る目なのである」。

確かに、後の丹羽は、『わが母の記』^⑩、「母の日」^⑪、「母の晩年」^⑫、「わが母の生涯」^⑬など、避けては通れない実母の老耄の現実を受容し、母との確執を克服し、母の人格の肯定に至るまでの自分の複雑な感情を淡々と綴っている。とくに、その中・後期の作品のなかで、佛教の教えに導かれ、「老醜嫌悪」の呪いから解かれた老母の人物像を描き上げている。紙幅の関係で、それらを詳しく論じるのをほかの機会に譲ることにするが、それらの作品には、「厭がらせの年齢」に見られる「非情」な冷酷さがだいぶ和らいており、その「非情」に変

化が見られることは明らかである。しかし、「厭がらせの年齢」が発表された時点からみれば、それはだいぶ先のこととなる。

おわりに

ほかならぬ作者丹羽自身が晩年になって、彼を介護する家族に、その「非情」な現実を体験させることになることは、誰が想像できたであろうか。そして、作者の妻によって、「うめ女」の姿が再現されたのである。一九八七年九月、八十三歳になる丹羽は、都立板橋老人医療センター（現在の東京都健康長寿医療センター）で、初期のアルツハイマーと診断された。翌年、妻の綾子もパーキンソン病と動脈硬化症と診断され、そのほかに「まだらボケ」（脳血管性認知症）の症状が開始した。百歳以上の長寿に恵まれた丹羽は、晩年の約二十年は認知症に罹り、長女の本田桂子とその介護にあたった。桂子の介護体験記によると、丹羽は典型的なアルツハイマー型認知症で、徘徊、妄想、鬱的な症状があったが、その進行が緩やかで、温厚な性格が最後まで保たれ、「他人（介護者）に迷惑をかけることも無く、いたって平穏なボケ方」であった。一方、正常なところもあるが、脳血管性認知症を患った母の綾子のほうは、「身体は不自由でも、頭はシャープで口も達者」なので、周囲から「不満病」と呼ばれるほど、どんどん意固地になっていったと記述している。桂子は、料

理家としての仕事を続けながら、父の介護を二十年近くしてきたことがストレスとなり、彼女自身がアルコール依存症になり、治療を受けることを余儀なくされた。二〇〇一年（平成一三年）に虚血性心不全のため、六十五歳の若さでこの世を去った。孫の介護を受けることになった丹羽はその三年後に亡くなった。

もう一度作品を振り返ってみよう。そのなかで作者が登場人物につきのように語らせている。

永生きは立派なことだとか、生命賛美ということを、あたしは疑うわ。九十まで生きたから立派だといふことは、無責任な、好奇心以外の何物でもないわ。（中略）人間は何故生きなければいけないのか、という問題は、生きていることに何か意義が見だせる間のことでしょう？（中略）あたしたちを厭がらせるだけの生命なんて、ちつとも尊重出来ない。それでもなお生命は大切だと思わなければならぬのかしら。（中略）人間の生命といふものは、美しいとか、正しいとか、大切だとか、有意義だとか……さういふ観念では割り切れるものではなくて、何か、もつと他の、思ひがけないものの正体のやうな気がする。

そこには、「孝は人倫の根本」という伝統的な倫理観の非現実性や、長寿を手放しで謳歌することのできない現実に対する作者の批判が込められている。丹羽の関心は、「尊厳の

ある生き方とは何か」に向けられていると理解できる。この作品を皮切りに、老母を描いた、「母の晩年」と「わが母の生涯」など、丹羽後期の一連の作品は、その答えを模索する作者の足跡が見られる。もちろん、現代社会の高齢者問題はより深刻で、複雑になっているが、いち早く高齢者問題の社会性を見出し、人々の注意を促そうとして、ひとりの老女の悲惨な境遇に投影した「老い」の現実を描き出し、人生の極限的な一面に焦点を当てたこの作品は、「終活」が盛んに叫ばれている現代の人々にも大きな示唆を与えるものではないかと思われる。

（博士課程後期課程二年 倉持 リツコ）

注

（1）一例を挙げれば、川崎市の有料老人ホームでの連続転落死事件である。二〇一四年十一月から同年十二月にかけて、神奈川県川崎市幸区幸町二丁目の有料老人ホーム「Sアミーユ川崎幸町」で発生し、施設の元職員が逮捕され、連続殺人事件と判断された。このような事件は後絶たないが、ここでは枚挙にいとまがない。

（2）「私の疎開先、二夕間借りで、百姓家ですがそこへ八十六の妻の祖母を突然に押しつけられて悲鳴をあげてゐます、老人はどこでも扱ひに困つてゐるやうです」（一九四六年二月二日）尾崎一雄の『続あの日この日』により。

（3）丹羽文雄「非情の精神」『東京新聞』夕刊昭和二二年三月二〇日『文藝時評大系 昭和編』第二巻 ゆまに書房（二〇

〇八年一〇月)

(4) 丹羽文雄記念室編『丹羽文雄著作目録』(四日市市立図書館、一九九七) および四日市市立博物館展示によれば、オランダ語版、ポーランド語版、フランス語版、イタリア語版、スイス語版、英語版、チェコ語版などがある。中国語版には一九八一年に劉振瀛による『討人嫌の年齢』がある。

(5) 『現代文学大系46 丹羽文雄集』(筑摩書房、一九六四年)では、「うめ女が五十二歳の時」に、三十歳になる娘と死別したとあるが、「二十歳になる妹の」瑠璃子の年齢が計算に合わない。うめ女の現在の年齢から推算すると、瑠璃子の母親は三十四年前に亡くなっていることになる。

(6) 認知症の症状には中核症状と周辺症状がある。認知症になると、記憶障害や判断力の低下などの中核症状が起こる。一方、かつて「周辺症状」と言われていた徘徊や妄想、暴力や不潔行為などが、行動・心理症状(BPSD)と呼ばれている。介護者が対応に苦慮する多くは、中核症状よりもBPSDである。これまで、BPSDは中核症状に伴って起きると考えられていたが、最近の研究によると、周囲の対応の変化や環境への不適応、さらに薬の副作用などの要因が絡み合っていると認識されるようになった。それを背景に、介護側の対応の變化も求められる。例えば、高齢者に接するとき、たとえ不可解な行動をしても、最初から認知症だと決めつけないで、まずは、肯定的な態度を見せて接する。それによって、自分の人格が否定されたと反発したり、意固地になったりすることがある程度避けられる。結果的に、両者の交流が生まれ、認知症を遅らせる効果が期待できる。

(7) 『厭がらせの年齢』論―〈老い〉をめぐるジェンダーの偏

差―『社会文学』*35号 日本社会文学会 二〇二二年

(8) 同注3。

(9) 同注3。

(10) 『鮎・母の日・妻 丹羽文雄短篇集』解説(285頁) 講談社(二〇〇六年一月)

(11) 『わが母の記』一九四七年七月 地平社 『手帖文庫』

(12) 『母の日』一九五三年十月 『群像』

(13) 『母の晩年』一九五六年十月 『群像』

(14) 『わが母の生涯』一九八四年五月 『週刊朝日』

(15) 『丹羽文雄文藝事典 和泉事典シリーズ28』伝記年譜 和泉書院(二〇二三年三月)

(16) 『父・丹羽文雄 介護の日々』中央公論社(一九九七年)

(17) 『丹羽文雄集作品集 第二巻』『厭がらせの年齢』角川書店(一九五五年一月)